【准看護学院第５１期生 戴帽式】

自衛隊札幌病院准看護学院（学院長　本間１佐）は、令和８年１０月１日（木）准看護学院第５１期生２７名（男性１２名、女性１５名）の戴帽式を挙行した。式には、北部方面総監部医務官、北部方面衛生隊長等のご臨席を賜り、厳粛な雰囲気の中、戴帽の儀が執り行われ、一人一人に看護の象徴であるナースキャップが贈られた。ナースキャップを戴帽した学生は、凛とした表情で新たなステージに立ち、第５１期生が心を一つに衛生科精神を唱和した。

病院長（菊池陸将）は訓示の中で、「自主的に学べ」「常に目的意識をもって行動せよ」の２点を要望した。１点目の「自主的に学べ」については、「机上で学んだ知識に病態を当てはめるだけでなく、患者に寄り添い、訴えに耳を傾け、状態を丁寧に観察することにより初めて得られる知見がある。逆に、中途半端な気持ちで臨めば患者に不利益を与えてしまう可能性もある。第一線の現場では自身が修得した知識と技能のみが頼りであることを認識し、患者から教えてもらうという謙虚な姿勢を忘れず自主的に学んでもらいたい。」、２点目の「常に目的意識をもって行動せよ」については、「今後、予定された実習等の目的を理解し、常に意識することで教育効果は格段に上がる。単に準備されたことだけをこなすのでなく、何のために行うのか、これを行うことで次に何ができるようになるのかを考えながら行動してもらいたい。」と要望した。

学院長の式辞では、「近年、医療現場においてもＡＩによる診断支援や業務の効率化、最先端のロボティクスなど、目覚ましい技術革新が進んでいる。しかし、いかなる時代であっても、患者の痛みに寄り添う「共感の心」、声なき声に耳を傾ける「観察眼」、そして不安を和らげる「手のぬくもり」こそが、時代を問わず必要とされ続ける看護の本質である。」と話され、学院長要望事項として「学院一丸」「日々前進」に加えて、「失敗を恐れない学びの繰り返し」を要望した。

ご来賓を代表して北部方面総監部医務官（田中１佐）からは、「共に学び共に悩む同期は宝物です。同期とは仲良く切磋琢磨し、よきライバルとして共に成長してください。また、指導してくださる教官に感謝し、その指導を信じて、頑張ってください。」と期待を込めた祝辞が贈られた。

本戴帽式により、新たな決意と希望を胸に、次のステップへと一歩を踏み出した第５１期生は、これから多くの学びや経験を重ね、思いやりと責任感を持った准看護師たる衛生救護陸曹へと成長して行く。



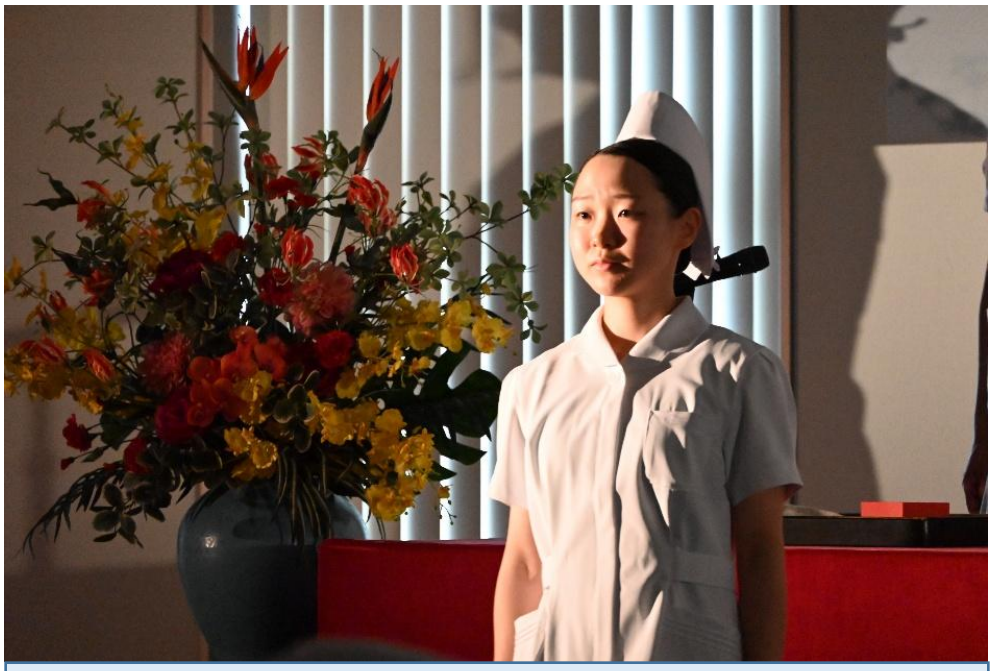
自衛隊札幌病院長（菊池陸将）



准看護学院長（本間１佐）



ナースキャップを贈られる学生



厳粛な面持ちの51期生



真剣な眼差しの学生



決意を新たに衛生科精神を唱和



第５１期生集合写真



准看護学院集合写真